

## ハイデガーの人間学観

藤 井 敏

マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』や『カントと形而上学の問題』などのいわゆる初期の一連の論作が公刊されると、それらは人間学的に解釈されたことがあり、現在では一般にそれは過誤であるとされてきているのも周知の事柄である。初期の論作が公にされた当時、人間学というような問題提起を期待する時代的趨勢が確かに一方には存していたと言つてよい。そのような時代にハイデガーもまた、そういう期待を担って迎えられたのも決して理由のないことではなかったものと思われる。確かに『カントと形而上学の問題』の中でハイデガーの言うように、今日ほど人間について多くを知り、様々のことを知っていた時代はなく、今日ほど人間についての知識を説得力のある魅惑的な仕方でも表した時代はないし、今日ほどこの知識を迅速かつ容易に提示しえた時代はない。しかしまた、今日ほど人間とは何であるかを知ることの少なかった時代もなく、我々の時代ほど人間が問うに値するものとなった時代はない(『カント書』第三版一八九頁)のである。このようにハイデガーは、マックス・シェーラーに共鳴しつつ、人間の本質への問いを強調している。

それではハイデガーは、おのが思索を人間学的な問いとして考えていたのであろうか。たとえそれがいわゆる「哲学的」人間学であるとしても、そのような問題提起として自己の哲学が規定されることを、ハイデガーは容認していたのであろうか。ここで我

々はその執れかに同調したり、ハイデガーの哲学は人間学的なりしや否やについて論ずることよりもむしろ、それらに先立って考えられなければならない事が存するのに気付く。それは言うまでもなく、アントロポロジーがたとえ哲学的人間学であるにもせよ、ハイデガーはそれをどのように見て取っているのか、またハイデガーのコンテクストに表われたる哲学的人間学とはいかなるものであるのか、ということである。これらの点が先ず以って明らかにされなければならぬと考える。この点を十分検討することなくして、ハイデガーの思索は人間学的なりしや否やを論ずるのは、突り多い議論とは言えず、結局は或る一つの主張にしか過ぎないことになる。それでここでは特に、ハイデガーは人間学をどのように観ているのか、そして彼の思索といわゆる哲学的人間学はいかなる関連を有しているのか、またいかなるかを中心に少しく考察しようと思う。

『存在と時間』は言う、「それ(現存在の分析論)は現存在の完備した存在論を与えようと意図することはできないが、哲学的人間学というようなものが哲学的に十分行き届いた基盤の上に立脚すべきであるとすれば、現存在の完備した存在論は勿論仕上げられていなければならない」(二七頁)と。このことから、もし現存在の完備した存在論が打ち建てられ完成しているのであれば、それは哲学的人間学の基盤となりうるものと考えられ、その限りにおいて哲学的人間学の可能性を標榜しているように思われる。しかし現存在の分析論は、存在への問いにおける第一の関心事ではあるが、もともと存在の問いの仕上げのための準備的段階である。それ故この分析論は完備したのではなく、暫定的なものであるという限界を持つ。そしてハイデガーは「なんらかの仕方

可能な人間学或いはそういう人間学の存在論的基礎づけという意図に関して、以下の解釈はただ若干の、非本質的ではないとはいえず、『断片』を与えるに過ぎない（同上）と微妙な言い方をしている。つまり、現存在の分析論の有する或る限界内において、少なくとも現存在の存在論が人間学の哲学的基礎づけに関わりのあることを認めている。そこにはまた、非本質的であるとは言えない、若干の断片的寄与の存することも看過してはいない。差し当って彼のテーマである現存在の分析論と哲学的人間学との関連を全面的に否定してはいないが、しかしなぜか極めて消極的な表現でその関連性や断片的寄与の存することを付言しているのであろうか。これには幾つかのことが考えられるが、それにはいささか哲学史的な詮索を要することにもなるので、ここでは差し控える。

またハイデガーにおいては、人間学は心理学や生物学と並び称されており、現存在の有り方を実証的に研究する専門分野として捉えられている。また彼は、実存論的分析論において、存在の間に劣らぬ緊要な課題として、人間についての哲学的究明に先立つアプリアリな原理といったようなものを明らかにすることを掲げている。従って現存在の分析論は、人間学に欠けていて、それに先行しているアプリアリをあらわにするものである以上、人間学の哲学的基礎を成すものであり、それ自身やはり一箇の哲学的人間学であるかの如く思われる（『存在と時間』四五頁）。

しかしながらなるほど実存論的分析論は、人間学がそれに基づいていながら、それを問うてはいないアプリアリをあらわにし、人間を実存として分析するけれども、それ自身は現存在の完備した存在論ではなく、哲学的人間学の基礎とはなりえない。恐らく

ハイデガーが念頭に描いていたであろう「哲学的人間学」というのは、人間とは何かという問いの哲学的究明であるが、この問いの哲学的な基礎は現存在の完備した存在論であるから、かかる哲学的基礎に基づく限りに於いての「人間とは何であるか」という問いに外ならなかったであろう。

以上のように『存在と時間』においては、固より哲学的人間学は主要なテーマではなく、そればかりかこの書は哲学的人間学に對して否定的であり、冷淡でさえある。それにも拘らず、哲学的人間学とは次元が異なるとしながら、それとの或る微妙な関連性を認め、その基礎づけに現存在の分析論が断片的にはあるが寄与し得る可能性をも示唆している。哲学的人間学との対決、批判を通して、哲学的人間学などという呼称や理念とは別に、しかも敢然として存在する「人間の本質への問い」の意味をあらわにしてゆこうとする意図を、かかるハイデガーの思索の内奥に覗き取ってもよいであろう。しかしながら『カントと形而上学の問題』の特に第四章における哲学的人間学との批判的対決を通して、現存在の形而上学へと彼の哲学的思索は歩み行くのであるが、後期に至ってもなお人間学について言及している箇所を散見しうるのである。それらの点を踏まえて、ハイデガーの思索の内に改めて『人間学と存在論的内的関連』（ハンス・コエヘラー）を問い直すようにする試みが最近少なからず為されている。このような成果は折目正しいハイデガー哲学の研究というよりも、現代の哲学的課題に応えようとするいわゆる実践哲学的な場においてよく経験される。しかし、かかるハイデガーの思想における人間学的方向というのは、実はハイデガーの著名な高弟達の一部にも既に宿っていたのではないだろうか。